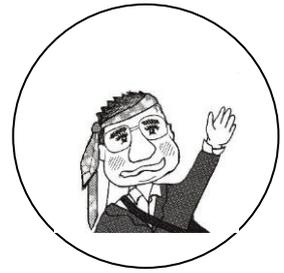


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「道を歩く人がやってきた」②

マザー・テレサ修道会は、多くのシスターが所属しているので、女性の修道会と思いがちだが、T神父と出合って男性修道士もいることを知った。

そのT神父のミサが梅田教会であった。司祭として聖堂に入ってきたときの祭服をみて感心した。インドそのままであった。一般にカトリックの司祭服はきらびやかなものだが、Tさんの白の祭服は、灰色にくすんでいた。足元をみて、また感心した。インドで履いているスリッパのままであった。

Tさんと相前後して尼僧Kさんがインドから帰ってきた。K家はわが市場からかなり離れたところにある。あのころは店舗も少なかったので、遠くても買い物にやって来た。わが輩が店頭に立っていたころ、彼女は幼児であったので直接の面識はなかった。

Kさんに初めて会ったのは、一九八〇年後半にインド・オリッサ州にある日本のお寺であった。Kさんは、わがミトラ城で初めて会ったと言うが、全くその記憶がない。わが輩の記憶は、オリッサから始まっている。

『ノストラダムスの大予言』の著者五島勉は、世界中の「アスカ」という地名に注目、『幻の超古代帝国 アスカ』を発刊した。オリッサ州にも「アスカ」(Aska, Asika)という地名がある。Kさんたちはその地を訪ねて、インドまで探検にやって来た。そのころは「村」に近かったが、現在は二万人程の街になっている。アジアで最大の砂糖の生産地である。

アスカの近くに温泉があることを日本人僧から聞いて、そこも訪れた。三百年の歴史をもつタプタパーニー温泉 (Taptapani) である。そのころは整備もされていなかったが、現在では観光保養地になっている。

ノストラダムスの大予言はハズレも外れ、大外れであったことはご存知だろう。あれは、ゾクゾクしながら楽しんで読む娯楽本である。そもそもわが輩は五島勉のことを信用していなかった。わが輩の学生時代、下宿の縁者に久直おじさん (新聞社勤務) という人がいた。京大の哲学科出身で、ときどき哲学の話などをして楽しんでいて、その人の名が五島の本に載っていた。不思議な体験をした、その時に久直さんもいた、と書かれている。久直さんによると「そんなことはなかった」というわけである。久直おじさんは苦笑いをしていた。

わが輩も、Kさんたちを否定することもなく、苦笑いしながら探検の成果を聞いた。もち

ろん、「アスカ」には古代帝国なるものは何もなかった。

今から七年程前に、突然Tさんが訪ねてきた。

「インドで出家したい」

突然のことに驚いたが、その場でインドに連絡を取り、出家の道を開いた。わが輩には突然であったが、Kさんにとってはゆるやかな決意であったのであろう。一人息子も二十歳になった。五十歳になれば、息子を独立させ、尼僧になろうと決めていた。

そのKさんが一時帰国してきた。老齡の両親を案じてのことである。わが輩の前に現れた時、白の僧衣は灰色にくすんでいた。インドそのままであった。

来年も帰ってきますか、と聞くと、「十年は帰ってきません」と答えた。ご両親とは今回が最後となる。古来より、家を出た者は親の死に目にあえないものである。

以上のようにお二人を紹介すると、何か堅苦しい「神父さま」、「行者さま」のように思われるかもしれないが、わが輩には（失礼ながら）お二人にソース味というのか、関西風の人柄、親しみ深さが感じられる。

もちろん、お二人ともコロナウイルスに感染、後遺症に悩まされ、死線に近い「道」で生きていることは確かである。

さてさて、昨年「出家して結婚する」という女性がいて、のけ反るほど困惑したことがあった。

「出家」という単語は、正に家を出るという意味である。「結婚」ということは、家族形成すること、つまり家に入ることである。「出る」と「入る」を同時に行うことができるか。言語的には、入るから出る、あるいは出るから入る、どちらも成立する。どこに基点を置くかで、両方ともに成立する。たとえば、映画館に入るから出る。買い物に出て、家に帰る（入る）、などである。ところが映画館に右足で一歩入り、左足で一歩出れば、映画を観ることができるのか。身動きできない意味のない行為である。

生と死についても同様である。人は産まれるから、必ず死ぬのである。

生と死は対立概念である。言語的には、死んで生きる、という表現も成り立つが、表現技法の問題である。これら対立するものを、ひとつの「生死」としてまとめ上げるのは、哲学の問題である。それを実践体験するのが宗教である。但し、哲学にしろ、宗教にしろ、ひとつにまとめ上げることは容易なことではない。

「道」を歩くと、老若男女だれでも躓く。なぜかと問われれば、わが輩は「わかりません」と口にだすしかない。わが輩は「道」を歩んだことがないからである。だから、今になっても、躓かない。